

Title	歴史と歴史家
Sub Title	
Author	瀧本, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.4 (1921. 4) ,p.551(83)- 567(99)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210401-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

み、代議士の中から、一軍に二人宛の軍事視察委員を派遣して、此の如き事なきを期する。と共に、側ら新募兵の愛國心を激厲せしめた。内亂鎮撫の爲にも、亦代議士は特派せられ、後には各州に派遣せられて、知事の如く地方政務にも執筆するに至つたのである。(註三) サン・キュロット(Sans culotte)は breeches-less patriot 即ち「半洋袴なき愛國者」の義である。革命前には貴族は概して「膝までの洋袴」を用ひたのであるが、革命勃發後、革命黨は従來労働者に限り用ひられし長洋袴を穿ちて民主的精神を示した。即ち短洋袴を履して、長洋袴を用ひることは、自から革命に味方する愛國者の表徴と認めらるるに至つたのである。

(註四) Madelin: The French Revolution p. 356

(註五) カーライルがシヤルロット・コルデーのマラー暗殺事件を評して、「此の如き方法に於て、最美の者と最醜の者とを衝突して、互に相滅ぼした」と曰へるは、文章として對照の妙はあるかも知れないが、佛國革命の大主義大目的から觀察すれば、必ずしも肯綮に申つて居る評言とは思はれない。(Carlyle: French, Revolution Terror. Chap. I)

(註六) クートンとサン・ジュストとはロベスピエールの兩腕とも稱す可き幕僚であつた。前者は身體不具であつたけれど、其の識見、儕輩を抜き、後者は信念の堅固と裁斷の敏活とに於て、却てロベスピエールに勝つて居た。ロベスピエールが結局佛國の政權を掌握したのは、是等兩人が内から彼を助けた爲であつたと云つても可い。

(註七) カーノも公安委員の一人であつたけれど、彼は政治家と云はんよりは寧ろ行政家であつた。彼が佛國の軍制に加へた大改革は、佛軍をして夫の如き大勝利を獲せしめた。後年ナポレオンをして歐羅巴を征服せしめたるは、カーノの此の軍制の功が與つて多きに居るのである。(完)

歴史と歴史家

瀧本 誠 一

歴史(History)は言葉通りに之を解釋すれば making another to know a thing as perfectly as you know it yourself を意味するのであつて、歴史家は faithful witness of the truth を意味するのである(W. J. McCullagh's lectures on History. p. 60)然れども是れは單に History なる言葉の起原を示しただけのことであつて、近世に於ては此の言葉はコンナ漠然たる意味でなく、モット有意義に使用せらるることとなつたのである。

言葉の意味の變遷を辿つて、其の由來を詳かにせんとすれば、其事それ自體が史學の發達史を叙述する様になつて、中々一朝一夕に出来る仕事にあらざれば、コハ姑らく別問題となし、近世學界に於て、一般に概括的に、歴史と云ふことは、宛も現在生きて居る人物の傳記と同じく、生命を有する社會の傳記として認めらるるもの如し、W. P. Johnston 氏は米國歴史協會雜誌(一八九三年四七頁)に掲げたる論文に

於て、人間は歴史の最初の前定である、歴史の始めと終りは人間である」と云へりしことありしが、茲に謂ふ所の人間が個人のみを意味するのでなく、社會を組織する人間全體を指示するならば、氏の云ふ通りであつて、而かも其の人間は生活を有する人間であらねばならぬ、即ち換言すれば歴史は社會を生きた人間として取扱ふべく、死した人間として取扱ふべからず、死屍を解剖臺に横へ、皮を剥ぎ肉を割き、臟腑を引出し、頭蓋を叩破つても、生きた人間の全部は分らないのであつて、人間の全部を知るには其の精神上に屬する重要な部分を吟味するの必要があるのである、故に社會に於ける人間の歴史は其の心理の作用を説明するのが最も重大の仕事であつて、之を爲さざる事實の叙述は、全く無意義であつて、眞の歴史とは云へないのである、昔し畫人圓山應舉が山中の死猪を寫して、警服なる獵師に笑はれたる奇談ありしが、生きた社會の潑刺たる活動を畫かざれば、歴史も亦死猪の畫に異ならざるのである。

最近の學者中には歴史と心理學との關係を高調し、歴史ソレ自體が應用心理學であると云ふものあり例へば Karl Lamprecht の如し余は未だ斯くの如き大膽なる

斷定を肯てするの勇氣なきも、兎に角人間社會の心理的生活の複雑したる現象が歴史の對象たることは明かであつて、此の新らしき觀察はアラユル科學の進歩應用に伴ひ、直接若くは間接に人間社會の内的生活を檢討詮議するの趨勢を來したる必然の結果であつて、古今人間の運命を支配するが如き社會の大現象は其の心理作用の發動に外ならざることを發見したるが故に歸因するのである、然れども人間の内的心理は其の外的環境に依つて支配せられ、外的環境は又其の内的心理に依つて左右せらるるが如く相互に因果關係を爲して離るべからざるは勿論のことなれば歴史構成の要素を心理學の一方にのみ要求して、應用心理學即ち歴史であるとは餘り云ひ過ぎの言ではあるまいかと信ず、故には余は歴史を以て應用心理學であるとするの説には與みせざるも、社會心理學上の現象が其の構成分子の要素であるとは云ふことは疑はないのである。

然れども歴史の社會心理的要素の作用は文化時期(Culture-Period)の古今を通じて一様に同一の働を爲したとは云へないのである、昔時民衆運動なるもの甚だ幼稚にして、個人の働きの強大なりし時代には英雄豪傑の行動が歴史の重大部分を占

め居たるや明瞭にして、カーライルが人間の歴史は豪傑の歴史であると云へりし言も事實確かにその通りであつた時代がありしに相違ないのである。曾て某歴史家が「クレオパトラの鼻が少し曲つて居つたならば世界の運命は今日とは全く違つて居つたであらう」と云ふ面白き歴史的の想像を下したることありしが、余は亦ソツ思へる一人であつて、例へば明智光秀の妻君の片眼が數瞰みでありしらんに、は信長は弑られないで済みたるかも知れないのである。信長が弑されなければ南蠻寺は榮へ、西洋人はドシ／＼渡來して我國の文化はドンな風に進向したかも分からなかつたのである。然らば光秀の妻君の容色如何は日本國民の運命に大關係を有したことは怪しむに足らないのである。古の佳人は一嘔一笑能く城を傾け國を傾く、道鏡の一物すら又國家を聳動するの方あつたのである。然らば Individual-psychic forces が社會の或る文化時期に重大の部分を働きつつあつたことは争はれざる事實なるも、十八世紀の終乃至十九世紀の始め頃に至りては社會の發達と與に民衆運動次第に勃興し、所謂 Mass-psyche の要素が段々歩を進めて高調し來りたれば、時々稀れには英雄豪傑の現はるるありて、文化の盛衰に影響したることなき

にあらざるも、要は皆民衆運動の大勢に乗じたるまでの事にして、偉大なる Sociological forces を離れては何事も爲し得ざることとなり、假令如何に強剛なる手腕を揮ひ、全然國民の運命を一變したるが如く思はるる大事業を爲しても、ソレはホンの一時的の現象にして、社會心理的の大勢力は到底個人の力に據つて左右することは出來ないようになつたのである。

社會の大勢斯くの如く變遷しつつありし際に當り、史學界に一新紀元を創開したる偉人 B. G. Niebuhr 出でて從來の舊説を悉く打破し、全く新たなる批判的眼を以て羅馬史を研究したのであるが、彼の中心思想は自家の取扱ひつつある社會の生きた精神を捉へて、其の潑刺たる眞生活を寫さんとするのであつて、單に事實の叙述は材料の堆積にして只だソレだけでは何等の用を爲さずと思惟したのである。彼が Hensler 夫人に與へたる書中に當時有名なりし歴史家 Miller を批評したる一言あり、最も能く彼が歴史に對する觀念の如何を見るに足るものである。曰く「ミューラーの才學は狭き意味の文學者として稱賛するに足らん、然れども彼は全然歴史的の批判を缺如し、其の想像力は極めて狹隘なる區域に局限せられ、彼が蒐

集したる古今の事實は老然たる大堆積を爲せるも、此等は皆彼の頭腦の中に枯死したる不統一なる大團塊となつて横はるのみと云つて (Niebuhr's Life and Letters, p. 231) ミューラーの著作の缺典は眞理の生々したる活氣なきにあつて存することを忌憚なく指摘して居るのである、而して彼が其の得意の羅馬史を著作するに於ては事實の相互の關係及其の効果を詳かにし、自家の學問の該博なる事と、其の眼光の透徹したる批判力とに依つて社會的のアラユル現象を説明したのであるが、彼の批評者 Loebell 博士は彼の羅馬史に就き Criticism here showed itself as not merely negative, but as the stimulant and assistant to creative energy, while a vivid imagination helped the author to perfect his production (同上書簡集五四二ページ) H. B. Adams が一八九四年米國バルチモアに開かれたる單科大學及豫備學校協會第六回大會の席上に於て讀み上げたる論文 *Is History Past Politics?* に於て、ニープルを近世制度史の眞の元祖として大に稱揚し、且つ獨逸及英國に於ける近世歴史家は總て皆ニープルの批判的にして制度上の觀察を重大視する研究法に従はざるはなし、獨逸に於ては O. Mehl はドリアン民族及ヘレニック諸國の研究にニープルの方式を採用し、Baechle は

雅典の公經濟を著作するに於て彼の研究法に依り、希臘史の大家として今現に生存する Curtius は彼に負ふ所多大なることを公言して居るのである、而して古今のアラユル歴史家の中で特に最も卓越したる Ranke も亦ニープルの例に従ひたることを熱心に吹聴し、余が歴史の研究上最大の裨益を得たるはニープルの羅馬史である、此の書は余が古代史の研究に就いて多大の刺激を與へたるものであつて、而かも余をして此上なき甚深の感憤を起さしめたる最初の歴史は實に此書であつたと叫ばしめた位である、ランケは實にニープルの羅馬史に學びたる歴史的批判主義 (Principles of Historical Criticism) を其の近世史及萬國史に擴充したるものであると云つてニープルの勢力の莫大なることを論じて居るのである。

ニープル及ランケ等は佛國革命前に於ける舊式の歴史家即ち所謂 Romantic School の臆測妄誕を排し、實際の事實に基きて最も深き注意を加へたる批判主義 Criticism を適用し、以て社會の基礎を組成したる Politico-Economical の現象を説明したのであるが、其の中にもランケの著作は近世に於ける歴史の最良の模範として、アラユル専門家の稱賛する所である、而してランケの特色は勿論ニープルの筆法に依

つて、制度史を徹底的に考覈したるにあるも、其の實彼が記述は絶対に公平無私にして、自己の僻見若くは感情に依りて故らに眞理を枉げ、事實を誣ふるの形跡なかりしと、又一つには彼が史實に關する斷定は常に正確にして能く其の眞相を穿ちたるの點に存するのである、例へば彼が著書中の白眉として知られたる *History of the Popes* は著者自ら新教徒たるに拘はらず、極めて公平なる意見を持して舊教に對し、敢て少しも己の味方に私するの説を唱へず、自分の思ふまま有體に問題の眞相を明かにして、是非の判斷を下したのである、是れが C. K. Adams が *Historical Literature* に於て *He has long been the favorite Historian with Historians* と評したる所以であらう、加之ならず今一つの例は彼が他の名作 *History of the Reformation in Germany* である、*マダムス* 又此の書を評して *A Book of Commentaries on the Reformation rather than a history of the Reformation itself* . . . it is to be valued for its judgments on difficult and obscure points rather than for its descriptions. The opinions of the author are quoted with the greatest respect by all recent writers on the period. と云つて居るが、蓋しその通りであつて、ランケの獨逸宗教改革史は宗教の釋明であつて、其の學界に最も尊重せらるる所以は宗教改革に關する事實の敘述よりは寧ろ其の難問に對する斷定の正確であつた爲めである、故にアタムスの言へる如く彼が本書中の意見は宗教改革時代の事を論ずるアラユル學者が最大の尊敬を以て引證したる所以である。

前にはニープルあり、後にはランケあり、専ら事實に基きたる批判的研究法を採用して、社會制度の根本を説明するを以て歴史の本色となし、所謂 *Romantic School* (ランケは此の一派が史學の發達に貢献したることは認めて居つたのである) の缺典を喝破したるより單に歴史を以て英雄豪傑の偉蹟を誦へる詩的物語と認めたるの傾向は次第に薄らぎたるも、之と同時に全然正反對なる歴史觀を呈出し、古今事實の敘述のみを以て歴史の眞面目であるとし、歴史家たるものは事實を有りのまゝに話して一切の意見、議論、批判若くは斷定を加へざるを其の本分とするが如き説を主張して、隱にランケ等一派に向つて赤旗を建つる者なきにあらず、夫の有名人なる羅馬史の著者 *W. Ihne* の一派は多くはソレであつて、事實の敘述に重きを置き、單に古今の出來事を蒐集、編纂するを以て歴史家の能事畢れりと思惟する者である、然れども斯くの如きは余の茲に喋々辯ずる迄もなく明白なる誤解であつて、

意見を用ひず議論を挟まず批判を加へず、又断定を下さなかつたならば、歴史その物は断じて成立することは出来ないのである。歴史は單純なる Annals にあらず、Chronicles にあらず、又 Event-Catalogue にもあらずれば、Factology にもあらざることは明瞭である。前既に述べたるが如く如何に精確に蒐集するとも事實その自體は歴史にあらず、出來事の記述は歴史の資料であつて、歴史そのものではないのである。譬へば植木屋の庭に聚置しある木石は如何に立派であり貴重であつても、之を目して庭園とは稱すべからず、大工の納屋に堆積しある材木は如何に良材であり如何に名木であつても、之を以て家屋とは云ふ可らざるが如く、歴史的資料の陳列のみでは正當の意味に於ける歴史とは云へないのである。歴史家を以て植木屋の如く大工の如く、一種の技術家と見るの觀念は稍々古き見方にして、余の取らざる所なれども、此の學派の一人たる McCullagh が其の歴史講義に於て歴史家の仕事を技術となし、*The work of art is to use the materials gathered by other hands, and out of these, dead and insensible as they are, to make symbols of ideal truth. Its business is with spirit more than matter. Or by means of matter, to make spirit speak with spirit, according to the untaught and unteachable*

gift which it possesses. (Lecture. p. 93.) と云ひ、又進んで *A so-called history, which is not the biography of a people, or a portion thereof, is nothing but a dead nomenclature of dead particulars, whereof no life can come. (Ibid.)* と云つて居るのは、正しき觀察であると云はねばならぬ。一體歴史家が歴史を述作するに意見、議論、批判若くは断定を一切除外することは如何にしても不可能であつて、マカラフの云へる如く歴史的の事實を生かして使用して、眞の歴史を組立つるには、常に自己の判断力を以て其の事實の眞偽と價値とを甄別しつゝ進まざる可らざるのである。マカラフ又曰く、*'Tis a lying world. Lies are as thick as black-berries. They spring up in Time's seedfield as elsewhere, without our sowing or tending. Let them alone, and they would choke and outgrow utterly the flowers. But while they are growing, and when you go weeding, 'tis above all things requisite that you know how to discriminate accurately the tares from the wheat. If they are undistinguishable, what can you do but mischief? (Ibid. p. 229.)* 有意無意に虚言を以て充たされたる古今の事實に對し、意見なく議論なく批判なく又断定なくんば、歴史家は如何にして史料を取扱ふべきか、ソんな事が可能であるかないかは三尺の童子と雖も猶能く了解する所ならん、故に Time は前に

云へる如く其の著作(羅馬史)に於ては單に有りの儘に事實の叙述を勉めたるも、ソレでも猶屢々 Discussions を用ひ例へば羅馬人が Carthage を討滅したる事實に就いては「羅馬人の此の行爲は世界古今の歴史上最も耻辱なる且殘忍なる不義不正の行爲である」として盛に之を攻撃し、其他 Punic 戦争後に於ける大紛争を記述したる所に於ては「希臘人が自己の勢力を誤用して他國人の權利を蹂躪して居つた事を穎利なる筆鋒を揮つて痛く排撃し居るにあらざるや、Thucydides すら尙然り、ニールスの流を吸める大歴史家の著作例へば Mommsen の羅馬史 Curtius の希臘史 Parrotte の米國史等皆最も痛切なる Criticism を用ひ又も大膽なる Discussion を加へて居ることは學界周知の事實であつて、殊に Mommsen の羅馬史の如きは我々經濟史を研究する者た坐右缺く可らざる一大要書であるが、本書は各篇殆んど全く獨立の大論文に外ならざること、何人も認むる所であつて、此の事は今更ら余の辯を待たざる所である、顧ふに西洋にても東洋にても歴史と云ふ名稱に値ひする歴史は、其の著者の意見、議論、批判、斷定等を一切抜きにして單純に事實の叙述のみで成立して居るものは恐らくは一つもないだらうと信するのである、東洋古代の歴史なるものは茲

に引證するに足らざるも、支那に於ける所謂歴史の模範は史記であつて我が日本に於ける歴史の模範は大日本史である、而かも此等の歴史には皆論贊なるものありて其の構成の一部分となつて居るのである、例の頼山陽の日本外史も亦每篇外史氏曰の議論あつて相當に内容の分量を占めて居ることは云ふまでもない事である、之を要するに歴史に著者の意見あり議論あり批判あり又斷定あるは、其の之れあるが爲めに歴史の體面を傷け其の本色を失するにあらず、所謂意見、議論、批判、斷定が歴史上の事實に基かずして、正確を缺き、公平を失し、著者が取扱ひつつある事實の意義を正當に説明するに足らざる駄説贅論を臚列するのが歴史家の最も忌嫌する所である、Mommsen 等の如き眼を以て社會の根柢に透徹したる意見であれば其の議論の多きを病まざるのみならず、却てその少くなきを遺憾とする位である、著者の Criticism の多く、Discussions の多きは史論であつて、其の少なきが歴史である、と云はば、ソレは程度の論であつて、歴史と史論は叙述と議論との割合を標準として專斷的に之を決定するの外なかるべきも、其の實歴史の外に史論なく、史論の外に歴史はないのである、例へば福田博士の日本經濟史論は史論の名あつても、

實は立派なる日本經濟史である、多くの Philosophical discussions を用ひたる歴史である、議論の正否、史實の眞偽は姑らく措き、又其の内容の分量如何は別問題となし、鬼に角書籍としての歴史構成法に於ては福田博士の史論は確かにモムゼンの羅馬史の構成法に類し、後者を適當に歴史と云ひ得べくんば、前者も亦一個の歴史であるに相違ないのである、著者の任意に命じたる名稱に拘泥して、歴史であるかないかを判断せんとするは女虎は女である、桃太郎は男であると早合點するの類であつてソレコソ危険の斷定であると云はねばならぬ。

然れども最近に至り十八九世紀より稍や其の萌芽を發しつゝおつた個性の主觀的完良 (Subjective Perfection of the individual) が其の統一的調合の意味でなく其の反對なる個別的異殊の意味に於て、一般の時代思想となり、現代の集成的文化 (Collective Culture) は全く個性の協同動作の上に存在する事を認められ、所謂 Subjectivity の思想が今日の特徴として現はれたる必然の結果、歴史の見方はランケ時代よりは更に一步を進めて制度の外形に重きを置くよりも前に既に述べたる如く Socio-Psychological の研究に依て Mass-Psyché の現象を徹底的に説明するを以て歴史の本分

とするに至つたのである、Socio-Psychological School の驍將 Karl Lamprecht 氏 Moderne Geschichtswissenschaft なる小冊子第一章に於て近世歴史家の立場を明にし「歴史家の仕事は所謂思想の歴史的學說(史論)の發達が始まる所の點に開始せらるるのである」と云ふことを高調し、是れ迄歴史家が事實の叙述と云つて單に其の叙述のみを標語となしたるは最早時代後れであつて、今や自然科学上の批判に依つて得たる莫大の傳說的論證などを歴史構成の材料として、大に之を利用するの必要あるが、ソレには該博なる學識あつて、而かも建設的なる精神の指導に待たざる可らざる事を論じ、或は時としては之が爲めに想像力の援助さへも必要とすることあるべきを主張して居るのである、余は前に述べたる如くランレヒトが歴史は應用心理學であると云へるの點は必ずしも肯定すること能はざるも、歴史の眞の説明を爲すの手引として應用心理學は勿論のこと、學理的心理學の力をも藉らざる可らざるは云ふ迄もなきことである、H. W. Maitland 曰く將來大歴史家が現出するとせば其の人は恐らくは古典學に詳しく數學に精通し、兼て又大に心理學及生理學を研究したる人々中より起るであらうと (Collected Papers. Vol. P. 416) 此の言亦少しく矯激に

失せざるやの感なきにあらざるも、今や歴史が非常に其の範圍を擴大し、議論もせねばならぬ、批判もせねばならぬ、推斷もせねばならず、想像もせねばならぬ、計算もせねばならぬ、比較もせねばならぬ、解剖もせねばならぬ、社會の生活状態に關するアラユル事を考覈するに缺く可らざる一切の手段を竭くして、其の生々たる真相を畫かざる可らざるのである。デパートメント、ストアの如く種々澤山のものを陳列したりとて、ソレで立派の歴史であるとは認められないのである。

余は歴史専門の研究者にあらず、専門家より之を見れば余の前論は勿論大に竭くさざる所あるべく、殊に歴史哲學の方面より之を評すれば固より難すべき所多かるならん、然れども余が歴史の一分科たる經濟史に對する根本觀念は如上の見地より進みたる結論に外ならないのである、複雑を極め虚妄の多きを常とする經濟界の事實は頽利なる Criticism を用ひ、充分の Discussions を竭くさざれば、中々其の真相を説明すること能はざるべしと信するのである。G. S. Callender なる人、米國歴史雜誌に於て Miss Coman の Industrial History を評し「本書は歴史として最も重大の點であるべき説明には、多く意を用ひずして、唯た事實を蒐集したるものである、我が

經濟史の要素は何であるかの問題、即ち如何なる出來事が發達の進路を決定するに最大の勢力を有したるかの問題は、主趣の其方面(説明の事を指す)に注意を拂はざれば發見し得られないのである、然るに本書に於ては事實の撰擇及排列に於て大に眼識の缺乏を感じるは又詮方なき次第である」と云ひ、又同時に Bogart の Economic History of the United States を評し「著者が本問題の取扱に對し經濟發達の理解に必要缺く可らざる主題を撰擇するに於ては更らに大に成功したりと云ふべし、著者は自ら明言して居るが如く出來事の因果關係を明かにすると云ふの點は始終確乎と其の心に守持して違はなかつたのである、其の説明の功程は(因果關係の説明)甚だ簡略にして往々淺薄を免かれざるも、著者は確かに此の説明の重要な事だけは常に了解して居つたのである」と云々(Am. Hist. Rev., Vol. XIX, P. 95)余はカレンダーが何人なるや之を知らず、又高慢嬢及ボガートの著書の價值如何を知らざるも、兎に角カレンダーが事實の蒐集記述のみを以て歴史の要領を失へるものとするは、正しき見方であつて、余の同意する所である、乃ち茲に本文を擲筆するに當り氣付きたるまゝ參考として掲げ置く。